

コロナ時代における入院や老人施設入所について

コロナの時代であろうとなかろうと、人は年を重ねると一定の割合で認知症患者となる。そして、それらの人の周辺症状が強く、家族がケアできない時は、施設（老人ホームなど）への入所という選択肢しかない。

コロナの時代である2022年12月現在では、入所後の家族との面会ほぼ不可能である。死亡退所で初めて面会できるのである。コロナのこの3年間、私の患者で家族を入所させざるを得なかった人たちからは、特に死亡後に後悔の言葉が聞かれる。しかし、自宅介護を不可と判断したのなら、彼らが生きていくためにはその選択しかなかったということも事実である。

従来から予定されていた入院であっても、前もってのPCR検査で陰性の結果が出る必要があるとあり、手術後の面会もきわめて制限される。手術当日であっても病院に行くことはできず、「何かあれば連絡します」ということになる。手術後に病院から電話があれば、悪い知らせではないかと強いストレスを感じることは想像に難くない。

コロナに対して、国は移動制限しない、旅行を勧めるという状況であるのに、なぜ施設や病院では面会が不可なのだろうか？ それはマスコミと日本人のメンタリティが大きな原因であると思う。

老人施設や病院で多くの発熱患者が発生すれば、マスコミは会見を要求し、幹部2～3人がテレビの前で謝罪するという光景になる。なぜ幹部の人たちがマスコミに謝らなければならないのだろうか？ 謝らないで、「これは避けられないことです」などと論理的に意見を述べたら、マスコミからもっと集中放火をあびる。そのうち、煽られた一部の国民も非難に加わるという図式ができあがる。

施設や病院での面会不可という対応は、それらの病院や施設では「感染対策をきちんと対策をしていますよ」というマスコミに対する申し開きのためであると考えられる。

現在の政府の方針として、長く我々が希望してきた公開での議論をとばして、2類から5類になりそうである。5類になれば、濃厚接触者の概念がなくなるだろう。その際には、施設や病院での面会を緩和し、クラスターについても調べなくてもいいルールを作成してほしい。

健康な人間のかぜ症状に対して、症状が強くなければ診断しないで対症療法でよいという共通の認識が必要だろう。

そして、免疫的に弱い人間が集まっているところでは、「感染症が発生して死ぬこともあり得る」という当たり前のことを国民全体が再度認識することが必要だろう。